

日本における発達障害がある児童生徒への合理的配慮の事例 ーインクルーシブ教育システム構築支援データベースの事例からー

インクルーシブ教育システム構築支援データベース（以下、インクルDB）は日本国内の教育関係者をはじめ一般国民に向けたインクルーシブ教育システム構築に関する理解啓発のため、関連する情報を提供することを目的に、2013年11月より国立特別支援教育総合研究所において運用が開始された。インクルDBのメインコンテンツは「合理的配慮」実践事例データベースであり、これは文部科学省のインクルーシブ教育システム構築に関するモデル事業において実施された、合理的配慮の事例が検索できるシステムである。障害種、学びの場、学年といった条件をそれぞれ指定して検索することができ、2021年11月1日時点で581事例が掲載されている。本稿では、「合理的配慮」実践事例データベースに掲載されている事例から、通常の学級における合理的配慮の事例を紹介する。

事例1：自閉スペクトラム症があり不安が強い小学2年生の事例（H25 0025PC2-AuED）

1. 事例の概要

自閉スペクトラム症が診断された小学2年生の事例である。知的発達は年齢相当であるが、不安が非常に強く、初めての活動を始めるまでに時間を要する、情緒が不安定になると登校を渋る、などの様子が見られた。授業では、板書をノートに書き写すことが同級生よりも多くの時間を要する、教師からの一斉指示の理解が難しいなどの様子が見られた。対人面では、集団のルールを乱す同級生を強く注意してしまう、自分に困ったことがあっても他児に助けを求められないなどがあった。

2. 合理的配慮の概要

上記の授業における困難をふまえ、板書の構成（文字の大きさ、色の使い分けなど）、児童のノートの書き方（毎時間ページの始めから書き始めるなど）、机上の学習用具（教科書、ノート、筆記用具など）の置き方など、学習上のルールを統一し、本児に限らず学級全体に示した。また、教員が個別に言葉かけしやすいよう、本児の座席を最前列とした。また、本児が書字に時間がかかることをふまえ、各授業ではポイントを穴埋めで記入するプリントを配付した（写真1）。学級の児童の前で発表する際は、不安が強くなるため、発表の手順が書かれたワークシートを見つつ発表するようにした。



写真1 穴埋めプリント

登校渋りが見られた際は、本児と教員と登校時刻を決め、その時間に投稿で来たら連絡帳にシールをはり、登校したことを称賛するようにした。また、学校の校門から教室までの途中のいくつかの地点で、そこまで登校できたことを称賛したり笑顔で迎えたりするようにした。このほか、給食の内容、一週間の授業予定を具体的にプリントに示し、見通しが持てるようにした。

登校渋りが見られた際は、本児と教員と登校時刻を決め、その時間に投稿で来たら連絡帳にシールをはり、登校したことを称賛するようにした。また、学校の校門から教室までの途中のいくつかの地点で、そこまで登校できたことを称賛したり笑顔で迎えたりするようにした。このほか、給食の内容、一週間の授業予定を具体的にプリントに示し、見通しが持てるようにした。

対人面の配慮として、同級生とペアになって学習課題を行う機会を多く設定し、同級生とやり取りしたり、わからないことを聞き合ったりすることを促した。

事例 2：注意欠如多動症がある小学 5 年生の事例 R01 0041PC5-AD

1. 事例の概要

注意欠如多動症が診断された小学 5 年生の事例である。姿勢保持が難しく授業中に机に突っ伏す、授業への集中の持続が困難でノートに絵を描いたり外を見まわしたりする、衝動的に走り出して怪我をする、約束や提出物を忘れてしまう、整理整頓が苦手で自分のものが散らかってしまうなどの様子が見られた。学年が進むにつれて学習内容の定着が困難になってきており、漢字の習得や板書の書き写しの困難、図形の名称等の算数の用語を理解することの困難、音楽のリコーダー演奏等の手先の活動の困難が見られた。

2. 合理的配慮の概要

本児の座席を教室の最前列にして、教師が適宜個別に声掛けして授業への注目や理解を促した。また、大型テレビや電子黒板を活用して、国語で教科書の文章を拡大表示して今どこを読んでいるかを示したり、算数で図形を視覚的に示して説明したりするなど、学習内容を視覚的に理解したり注目したりできるようにした。

本児の書くことの困難に対応して、書く量を調整して例えば計算問題では問題が記入されたプリントを配付して、本児はプリントに途中の式と答えだけ書くようにするなどした。宿題についても本児がやり遂げられるよう、量を調整した。

身の回りのものの整理整頓については、箱を用意して自分の荷物を片付ける場所を明確にした。

事例 3：学習障害がある中学 2 年生の事例 (R02 0020JC2-LD)

1. 事例の概要

読み書きに関する学習障害が診断された中学 2 年生の事例である。自分の考えを口頭で伝えることは同級生と比べても遜色なくできるものの、筆記をすることが困難で、授業中に板書を書き写すことができなかつたり、課題の提出ができなかつたりすることが続いていた。本生徒はこうした困難が克服できるよう努力するものの、できなかつたことが繰り返し替えられ、自信を無くしていく様子が見られた。友人関係は良好であり、学校の係活動や部活動は意欲的に行っている。

2. 合理的配慮の概要

本生徒の筆記の困難さに対応して、あらゆる教育活動において筆記の代替としてパソコンを活用できるようにした。まずは授業中に活用し、本人の要望をふまえて定期テストや学級活動等での活用へと広げていった。特に、理科などの板書が多い教科では、パソコンのカメラで板書を撮影し、自宅でノート整理するようにした。教科によっては本人が「筆記の方が書きやすい」と話したため、筆記でノートを書くようにした。

定期テストでは、本生徒の読みの困難さに対応して、別室で行い、特別支援教育支援員が問題

文を読み上げるようにした。また、定期テストでも書きの困難に対応し、例えば英作文ではテスト用紙にいくつかのフレーズを記入しておき、本生徒がそれを並べ替えて回答するなど、書くことの代替りの手段で問いに答えられるようにした。

事例4：注意欠如多動症がある中学1年生の事例 H27 0090JC1-AD

1. 事例の概要

注意欠如多動症がある中学1年生の事例である。興味があることには周りの状況が把握できないほど没頭する一方で、授業などでは注意の集中の持続が困難で、机に伏せてしまう様子が見られた。特に比較的長い口頭説明を聞き続けることが困難で、課題指示への聞き漏らしなどから、次の課題への移行に遅れてしまうことが多くあった。また、落ち着きがなく常に手足を動かしている様子があった。

2. 合理的配慮の概要

授業への注意の持続のため、電子黒板やタブレットを活用して授業内容を視覚的に示すようにした。また、教員が机間指導において、個別の課題説明や称賛などを行って授業への注意を促した。授業によってはグループによる学習形態を多く取り入れ、同級生と意見交換したり、役割分担して学習活動を行ったりする機会を作るようにした。また、授業で取り上げる課題を細分化し、1つ1つを短いスパンで解決しながら進めるようにした。国語では、本生徒からの自発的な発言で、授業内容を深めるものについては取り上げて応答するようにした。

事例5：自閉スペクトラム症がある高校1年生の事例

1. 事例の概要

自閉スペクトラム症がある高校1年生の事例である。学業成績は特に問題はないが、板書を書き写すことに時間がかかり、それにより教室移動や授業準備に送れることにつながっていた。集団活動で集団のペースに合わせられない、集団活動への参加に不安を示す、他者への意思伝達に困難を示すなどが見られた。寝坊や登校準備が間に合わないこと等により登校に遅刻する日も多く、遅刻した日は教室への入室や授業参加を拒む様子が見られた。

2. 合理的配慮の概要

中学校から引き継がれた個別の指導計画、個別の教育支援計画をもとに合理的配慮を計画した。遅刻した際の教室入室や授業参加への拒否に対しては、あらかじめ遅刻した際に学校であることを具体的に示して、本生徒に伝えた。本生徒が遅刻の理由をうまく説明できない様子もあったので、遅刻届を用意し、その中に遅刻理由を選択で回答するようにした。

学校行事などの集団活動についても、活動の流れやルールなどを本生徒に事前に具体的に伝えて活動の見通しが持てるようにするとともに、本生徒にその活動に参加できそうかどうかを確認した。本生徒から参加できそうにないと申し出があった場合は、本生徒と教員で対応を考え、それでも難しい場合は、本生徒はその活動を見学して次の機会への参加を促した。

対人面に関しては、本生徒から同級生への話しかけ方を具体的に練習するとともに、本生徒の

同意のもと、本生徒の特性を教員から同級生に説明する機会を設けた。その際は、他の生徒に特別扱いすることを求めるのではなく、相互理解を促す機会であると説明した。

学習面では、板書の書き写しの困難に対応して、板書の量が多い授業では穴埋めを記入するワークシートを用意するようにした。また、本生徒がノートの色分けのために筆記用具を持ち替えることが書き写しの負担につながっていることが分かり、本生徒と教員で話し合い、ノートは色分けせずに強調する部分は波線を引くなどするようにした。